

大井川橋

おおいがわぼし

東海道の最大の難所といわれた大井川に本格的な橋が架かったのは、やっとな昭和3年のことである。江戸時代、大井川には幕府の政治的・軍事的な政策によって橋を架けさせなかったといわれてきた。その根拠になったのが、三代将軍家光の弟で駿河・遠江の藩主であった忠長の事件である。寛永3年(1626)将軍上洛のとき、忠長が大井川に浮橋を架けたところ、2代将軍秀忠が「大井川は関所と同様の所である。橋を架けないのは東照宮(家康)の方針でもあった」として浮橋の撤去を命じた。そしてこの事件がもとで、忠長は改易になったという。

島田と金谷の間の大井川では、橋はもちろん渡船も設置されず、人足が旅行者をかつかいで渡す徒渉(かちわたし)の制度が定着していった。大井川は一年の半分以上が歩いて渡れるほどの水深しかなかったから、軍事的要因説は成り立ちにくい。大井川に橋や渡しを設置されなかったのは、川が急流で橋脚の維持が非常に難しかったことや渇水時には水深が浅くなり、渡船の運行に適しなかったことなど、急流河川の性格に負う、広い意味での技術的要因が大きかったと思われる。また人足による徒渉制度が定着すると、渡船や架橋などの動きに徹底的に反対し、建設的な提案を事前に潰してしまうことになった。大井川の徒渉制度は強固な幕藩体制によって守られ、幕末まで続くことになるが、政府の方針が変わると、まさに一夜のうちに崩壊しなければならない内部矛盾を含んでいたといえよう。

明治になって地元の人を中心になって架橋の試みがなされた。政府の援助がなかったため、もちろん有料の橋であった。最初の橋は明治9年(1876)3月に完成したが、この橋は常時の流水部のみを渡る仮橋で、歩行者一人8厘の料金がとられた。この橋はたびたび流失し、明治10年には4回も流されたという。その後、明治13年に本格的な木橋の架設が始まっている。川幅約1300m、全ての橋が完成したのは明治16年4月のことである。この橋も明治29年9月の洪水によって流されて以降、復旧されず、人々は渡船によって通行せざるをえなかった。

昭和3年(1928)4月にようやく現在の大井川橋が完成し、天候に左右されずに、川を渡ることができるようになった。この橋は、橋長1000mを越える長大橋で、17連の下路式のプラットトラスが用いられている。

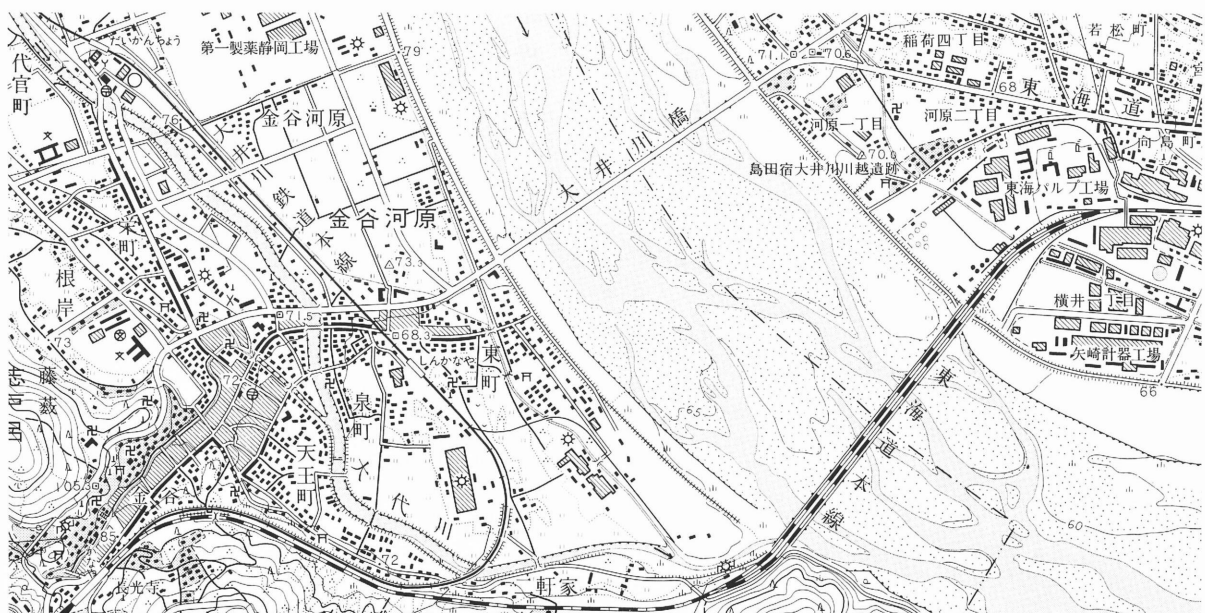
その後、自動車交通の増加にともなって昭和42年に橋側歩道橋が設置されている。また、昭和46年3月にこの橋の上流部に新大井川橋が完成し、国道の役割を新橋に譲ることになった。現在は静岡県島の管理になり、県道島田金谷線として地域交通を支えている。

〔MH〕

竣工年月：昭和3年(1928)4月8日
 所在地：静岡県島田市 - 榛原郡金谷町
 河川名：大井川
 橋長・幅員：1026.4m×車道8.3m(トラス外側に歩道1×1.5m)
 径間数・支間長：17×59.436m
 形式：下路曲弦プラットトラス



〈1994年3月，撮影・松村 博〉



(1:25,000 島田)